

# 特集

## 胸部単純X線写真について

Chest x-ray images

### 特集を企画するにあたって

樋口 昌孝

国立成育医療研究センター病院 呼吸器科

Masataka Higuchi

Department of Pulmonology, National Center for Child Health and Development

約20年前、私は衝撃を受けました。初期研修医制度のない時代、小児科医となって5年目、大学に帰室後、専門班として希望した呼吸器班に配属されました。専門班のカンファレンスは、毎週木曜の夕刻、国立小児病院に集まり症例検討；おもに胸部単純X線写真の提示が行われていました。

症例紹介・画像をシャウカステンにかけた後に雉本忠市先生、川崎一輝先生をはじめとする数名の先輩方の会話が始まります。

「これってあれですよね。」「そうだね。」「では次。」とまったく病名や解説が登場することがなく終了することが多々ありました。会話についていけず、帰りの車の中で川崎先生に質問し、ようやく一端を理解する日々を繰り返していました。

この人たちは、どのようにして読影しているのか？この写真からどこまで奥深く病態把握しているのか？と驚異に感じていました。

当時もCTはありましたが、解像度が悪く、撮影時に十分な鎮静を必要としていたため、胸部画像検査といえば胸部単純X線撮影でした。

では現在はどうでしょうか？症例相談に来られた医師や患者さんが持参された資料に胸部単純X

線写真がなく、CTだけの場合をよく経験します。

胸部単純X線写真を撮影していない？そんなはずはない。ではなぜ持参されないのか？

胸部単純X線は軽視されているのか。最近思う疑問です。

読めないのか？読まないのか？

今回の企画にあたって、放射線科医を代表する日本小児放射線学会元理事長 藤岡睦久先生と現理事長 野坂俊介先生に執筆をお願いしました。

藤岡先生は「胸部単純X線写真の重要性—CTに頼りすぎないために」、野坂先生には「CT所見から見直した胸部単純X線写真所見」をご寄稿いただきました。

最後に紆余曲折の末、「胸部単純X線写真をいかに読むか；第一歩」を私が記載していますが、その中でご紹介した内容は、先輩方から教えていただき、自ら実践しこれはいいと思っていることです。

読者の方が本特集を読み、胸部単純X線写真がどのような存在であればいいのか、とご再考いただけると幸いです。